

～景観改修で蘇る生誕地～  
橋本左内先生と生誕地の謎解き  
春山公民館長 柳沢全之

橋本左内宅跡碑

御物啓発録碑

生誕地・宅跡案内パネル

「常盤の井」標石

産湯の井「常盤の井」

- ・笏谷石の石垣に囲まれたオープンな景観
- ・親子で学ぶ橋本左内先生のころざし
- ・啓発録の五訓とふれあう生誕地

# はしもとさな い せい たん ち たくあと 橋本左内先生 生誕地・宅跡

橋本左内先生は天保5年(1834年)、この地、福井城下常盤町(現在の春山2丁目)で生まれた。幼いころから学問を好み、15歳のときここで「啓発録」を著した。16歳のとき大阪に出て、緒方洪庵の適塾で蘭学・西洋医学を学び、帰福後、父のあとを継いで藩医となった。21歳のとき江戸に出てさらに学び、24歳で藩校明道館の学監同僚心得(准校長)に任じられて教育改革に取り組んだ。その後、江戸において藩主松平春嶽公のそば近くに仕え、将軍継嗣問題や外交問題等の国事に奔走した。しかし、安政の大獄により幽閉され、安政6年(1859年)26歳の若さで斬首に処せられた。

昭和34年に橋本左内先生奉賛会(現在の顕彰会)が設立され、毎年4月11日に生誕祭が行われている。

生誕地・宅跡には、橋本左内先生が生まれたとき産湯を汲んだ井戸と、大正13年の皇太子殿下(後の昭和天皇)行啓を記念して建てられた「常盤の井」の標石が保存されている。また、昭和30年に建てられた「御物啓発録碑」がある。碑に刻まれている啓発録五訓は、宮内庁に保存されている橋本左内先生の真筆「啓発録」より謄写したものである。



橋本左内先生

川端哲雄 筆

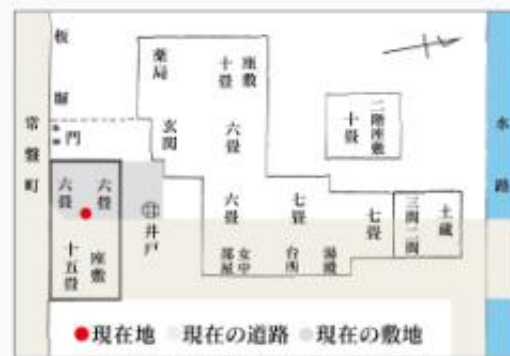
福井市立郷土歴史博物館蔵



御物啓発録碑



常盤の井



橋本家の宅地図

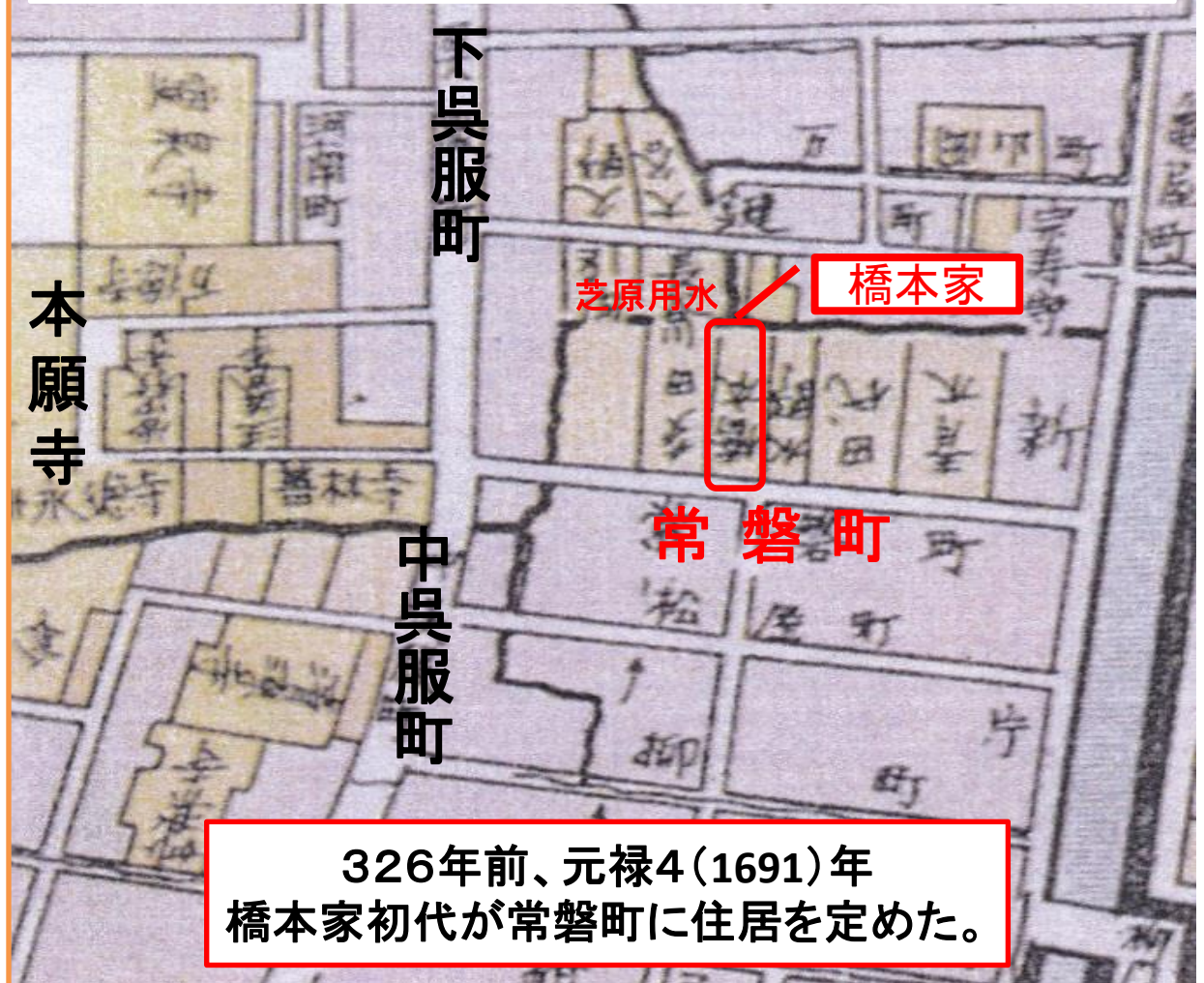
## 橋本家の先祖

室町時代中期の幸若舞創始者桃井幸若丸直詮(安)と伝わる。7代長氏の4男長徳が母方の姓橋本に改称、左内から数えて8代の祖。

## 橋本家の祖

長徳(玄貞)は22歳のとき江戸へ、幕府侍医西玄甫に外科を学ぶ。元禄元年2月福井藩主松平昌親の謁見を受け、二十五石五人扶持を 与えられ、同4(1691)年丹生郡西田中村から、**福井城下常磐町へ移る。**

橋本左内先生 天保5(1834)年3月11日  
福井城下常磐町に生まれる。



326年前、元禄4(1691)年  
橋本家初代が常磐町に住居を定めた。

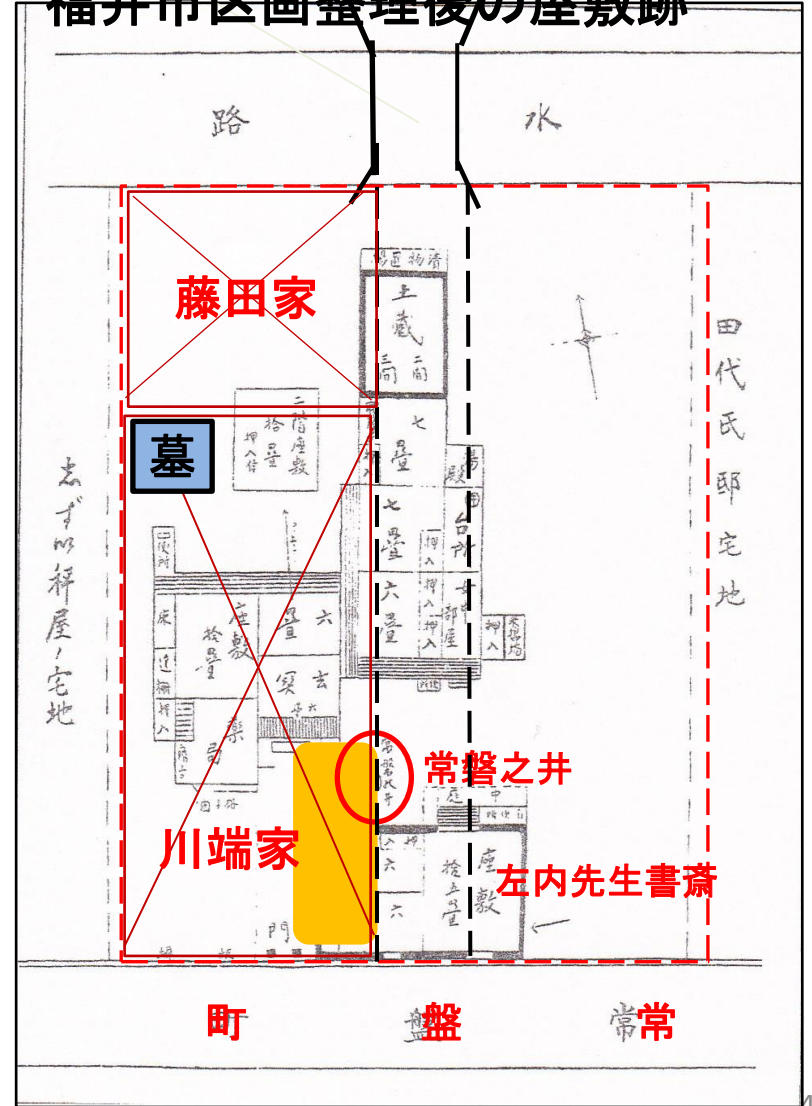
福井御城下之絵 文化3(1806)年 松平文庫所蔵

# 橋本家の屋敷図と現在の宅跡

安政7(1860)年の大火後  
母梅尾さんが再建した屋敷図



戦後の戦災・震災後  
福井市区画整理後の屋敷跡



# 橋本家屋敷図の謎



左内先生の末弟綱常の孫に当たる奥野信太郎氏（慶応大学教授で中国文学者）明治32年生まれ、昭和43（1966）没

## 奥野氏の随筆集

「中庭の食事 昭和52年（1982）論創社」  
収録随筆

「うちのご先祖」「ひとつの図面」

「大叔父橋本左内のこと」に、  
次の内容の記述あり。

「祖母である左内先生の末弟綱常の妻や、左内先生の姉木内烈子（当時東京に在住）が家の図を残そうと、中学生の信太郎に口述し下絵を書かせた、それを専門家に清書させ綱常の妻はそれをあっちこちに配ったものが、その後左内の伝記などの巻頭によく掲載されるようになった。」

\* 中学生のころ描いた・・・10歳、明治42年ごろ

景岳会「景岳橋本左内先生遺墨帖」掲載

# 橋本左内の肖像画の謎



佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画(肖像部分)

佐々木長淳筆 明治8年  
 明治8年 橋本家の依頼で描く  
 春嶽公筆「橋本左内小伝」と幅仕立て



昭和8年 東洋文化協会刊  
 幕末・明治・大正「回顧八十年史」  
 ウィキペディア・フリー百科事典



島田墨仙筆 昭和10年  
 福井の名士の依頼で描く  
 銅像の下絵として大正3年完成



西郷隆盛と橋本左内  
 尋常小學5年生修身書 昭和5年版



左内先生ご母堂  
 姉(烈子)と弟(綱惟・綱常)



西郷隆盛と橋本左内<sup>6</sup>  
 尋常小學5年生修身書 昭和13年版

# 橋本左内と西郷隆盛



昭和13年「尋常小學修身書」巻五



昭和5年「尋常小學修身書」巻五

## ☆「尋常小学校修身書」に掲載する左内像について

- ・文部省から「景岳会」に一任。
- ・景岳会会長 加藤寛治会長(福井出身、海軍大将)は…  
齋戒沐浴の上、親しく回向院(東京南千住)の先生の墓前に参拝して、  
恭しくこの旨を報告し至誠を捧げて暗示を得るよう祈願を籠めた末、  
ついに島田氏揮毫の分を選択提供することに決した。
- …「西郷隆盛のいかにも豪傑風な面貌と、左内の白皙瘦小まことに婦人の  
ような顔容が、相並べて対照せられ」
- …「永く本書を読む幾多の児童及びに対して、必ずや偉大なる感化を与える  
ものがある…」

# 橋本左内像の謎



足羽山 天魔ヶ池前  
大正14年12月制作

建設者 松浦操

原型作者 大塚楽堂

福井大学助教授(当時) 笠原行雄 制作



昭和36年10月制作  
福井市春山公民館



昭和39年10月制作  
福井市郷土歴史博物館



昭和38年10月制作  
福井市足羽左内公園



# 生誕祭(毎年4月11日挙行)の謎

橋本左内先生 天保5(1834)年3月11日誕生



春山小学校6年生 「橋本左内先生を讃える歌」 「献茶・献花」

昭和34(1959)年 橋本左内先生奉賛会発足  
生誕祭は毎年4月11日に、墓前祭は毎年10月7日に挙行を決定

# 歌い継がれる「左内先生を讃える歌」

一 常盤の松の色にはえ  
堅きみさをの先覚者  
その身は医家に生れしが  
皇国をおもう一筋に  
貫きとおす金剛心

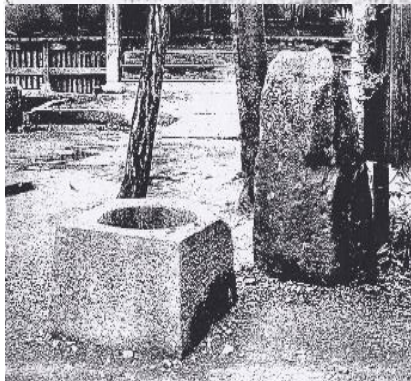
二 烈々燃ゆる真心に  
稚心をすてて著せる  
啓発録の五条目  
早くも国に名を得たる  
意気は岳飛を凌ぐべし

三 鎖国の夢は破られて  
風雲急に動くとき  
国歩の難にあたらんと  
憤然決起身を砕く  
りんたる誠忠ああ高し

四 苦冤は洗い難くして  
二十六年玉と散る  
烈士千古のいさをしは  
足羽の水ととこしへに  
流れて清く芳はしき

# 専念寺と産湯の井戸の謎

景岳先生生誕之地



昭和16年  
足羽国民学校読本



不死鳥「産湯の井」  
平成18年4月11日

- ・安政7(1860)年橋本宅は大火で類焼、母梅尾さんが再建。
- ・明治5年橋本宅は遠縁の「真宗専念寺」となり、境内に「橋本家門脇の建物」「産湯の井」「常磐の井標石」が永く遺存。  
(明治8年母梅尾さん、東京二男綱維宅へ移る)
- ・福井県知事 中村純九郎氏の筆、「景岳先生生誕之地」の碑が建つ。
- ・明治35年 専念寺は大火で類焼、再建。
- ・昭和9年 専念寺で橋本先生生誕百年祭。



# 啓発録の謎

啓発録

去推心

推心トハヲサナ心ト云事ニテ俗ニイフワ  
ラレニキコト也菓菜ノ類ノイニク熟セサ  
ルヲ毛推トイフ推トスハテ水クサキ處  
アリテ物ノ熟シテ旨ト味ノナキヲ申也何  
ニヨラス推トイフコトヲ離レヌ間ハ物ノ  
成リ揚ル事ナキナリ人ニ在テハ竹馬紙鳶  
打毬ノ遊ヒヲ好ミ或ハ石ヲ投ク蟲ヲ捕フ

立志

志トハ心ノユク所ニシテ我コ、口ノ向ヒ  
趣キ候處ヲイフ侍ニ生テ忠孝ノ心ナキ者  
ハナシ忠孝ノ心有之候テ我君ハ御大事ニ  
テ我親ハ大切ナル者ト申事聊ニテモ合点  
ユキ候ヘハ必ス我身ヲ愛重シテ何トソ我  
コソ弓馬文學ノ道ニ達シ古代ノ聖賢君子  
英雄豪傑ノ如ク相成君ノ御為ヲ勤キ天下  
國家ノ御利益ニモ相成候大業ヲ起シ親ノ

## 序文・矢島立軒 跋文・橋本左内

右啓發錄 距々十許年 前余亦  
 才也 予之雅好也 願者世賢  
 慨之 奮且厲 及余之自所及也 且  
 偶按舊賞 獲之 固所 予之未嘗  
 友子 東及弟 持好 以若 啓發 此  
 呼 十年前 既知 彼而 今自 此則  
 自十年前 之後 其得 何如 後  
 究 問不 敢 批 批 丁巳 皇月 景  
 岳 年 歲 時 年 二十 又 四

啓發錄 叙  
 大波之於學殖 而之 著學 監施 啓事 業則 留  
 子 附事 業不 殊其 效者 伯綱 興而 成之 然 諸余 像  
 論 於一 時者 孰得 孰失 有不 待言 言之 觀此 錄  
 然 者之 因書 愧心 以爲 叙  
 丁巳 閏 五 十二  
 矢島 立軒

左内先生15歳のとき、人に見せるためではなく、自分を戒めるために書き、愛用の書箱の底に仕舞い込んでおいた。24歳のとき書箱を整理しているとき見つけた。

- ・左内先生自ら後書きを書き、弟子と弟に与えた。
- ・後書きに左内先生自らの筆で「この啓發録は私が書いたものである、一本を清書し、弟子と弟に与えた・・・景岳年二十四歳」と書かれている。

明治に入り、土佐高知藩田中考頭伯爵の手を経て皇室に奉獻され御物となる(宮内庁保存)。

昭和時代に松平家当主が許可を得て原本撮影させたものが、現在福井市郷土歴史博物館が所蔵。

# 御物啓発録碑 (昭和30年3月建立)



御物啓発録

啓発録より謹写



家紋 五三桐

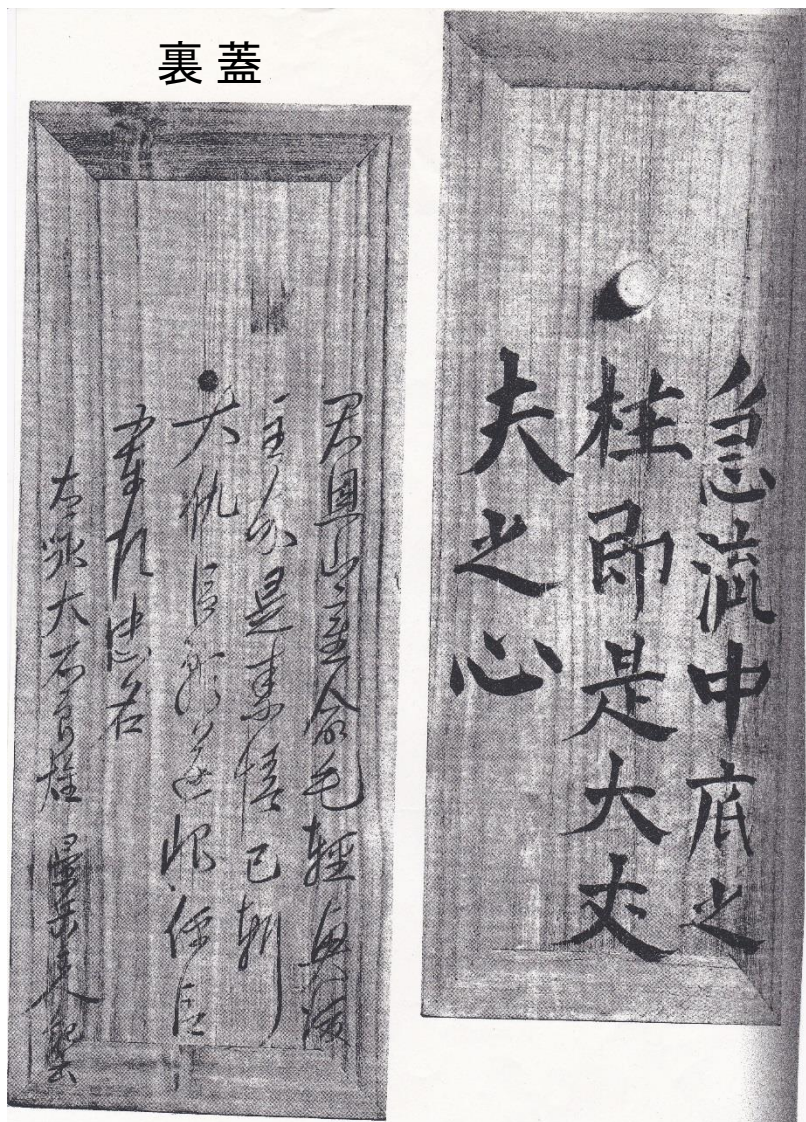


福井城石

謹写 石川信二

# 左内愛用の書箱の謎

裏蓋



# 橋本左内と西郷隆盛



- 將軍継嗣問題で共に手を携え活躍した盟友
- ・安政2（1855）年12月27日 水戸藩士原田八兵衛宅で初対面
  - ・安政4（1857）年12月14日 西郷隆盛への書面「西郷はこの書面を城山陥落のときまで革文庫に入れて携帯したが、没後吉井友實が携え帰って巻軸となし、一度明治天皇の叡覧に供し奉ったということである。」出典：滋賀 貞著言「景岳 橋本左内」



## 橋本左内先生の末弟 綱常（つなつね）

明治時代の医師。ドイツ留学。陸軍軍医総監、東京大学医科大学教授、初代日本赤十字社病院院長、東宮拝診御用などを歴任。子爵、医学博士。

橋本左内22歳（安政2年）のとき、医員を免ぜられ御書院番（士分）に抜擢された。

- ・綱常は左内全集にこう書いている、**左内22歳・綱惟16歳・綱常11歳。**  
拜命の日、母は激怒して「汝何ぞ辞せざりしと」、左内先生は泣くこと久しく、徐に告ぐるに君恩深重、また特に弟を医班に列して世業を継がしることを以てす。**綱惟**の志は航海術を学ぶにあり、故に辞す。  
遂に**綱常に命じ**且つ修業の法を問う。綱常答えるに只勉学ありその他を知らざることを以てす。**左内兄は喜んで泣く。**